

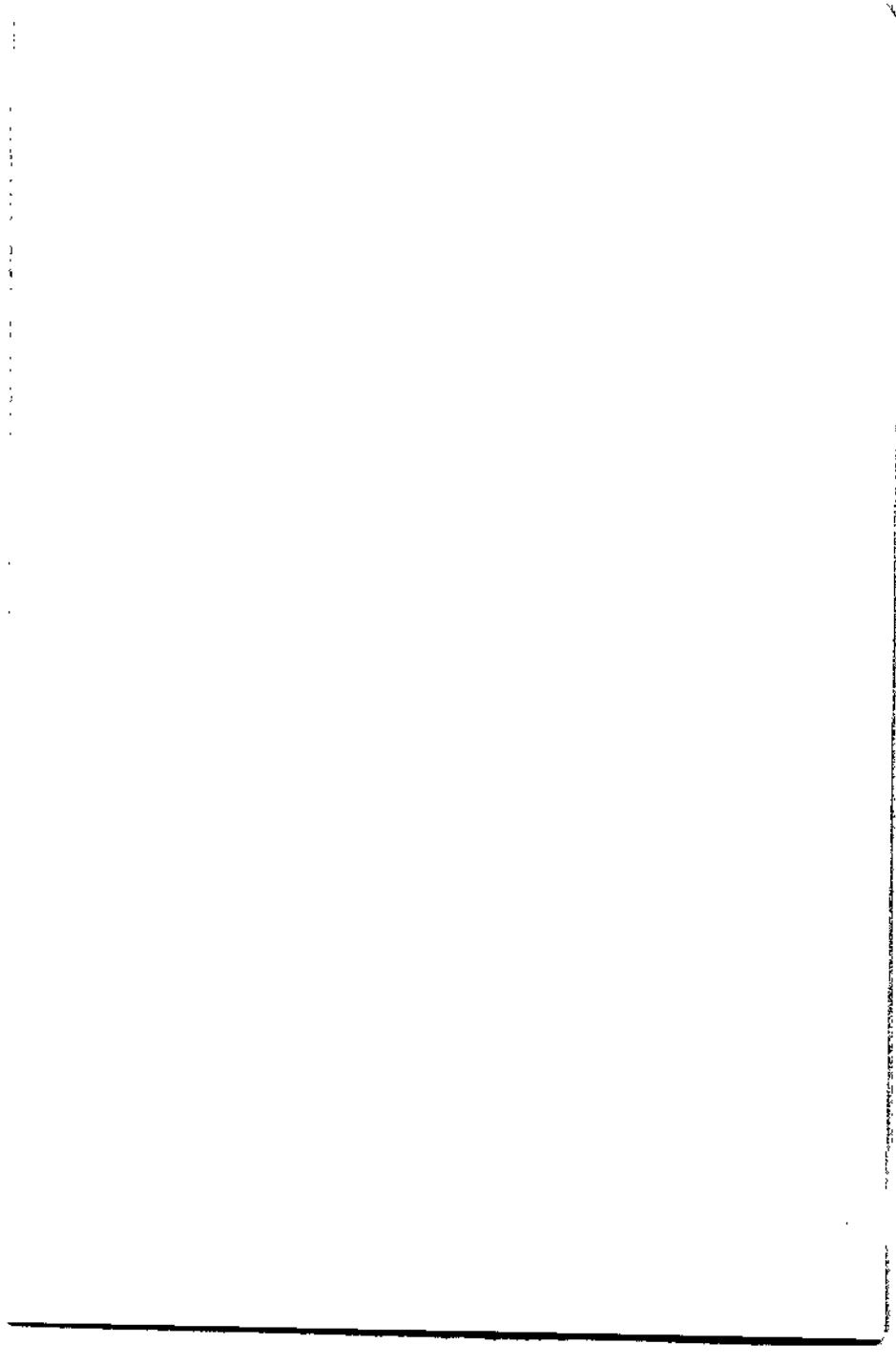
I

乱をおさめ 過ちをただす

出版の正常化



改革開放政策で、中米の共同出版も実現（86年）。関係者と会見する当時の胡耀邦総書記と本書筆者（中央左）



出版を論ず

「解題」これは現代中国を全面的に紹介した叢書の一冊、『現代中国の出版事業』（一九九三年八月出版）の序文で、出版の性格、位置、役割について概説している。本書に収めるにあたり改題した。

人類文明の発展において、もつとも偉大な発明のひとつは出版である。出版とはかんたんにいえば、人類がある種の物質でもって情報を記録し、ひろく伝える手段である。この手段が人類の手に握られることによって、文明は新しい性格をもち、人類は、知識をひろく伝えるのに記憶と口承に頼らなくてすむようになった。

「知識は力である」とは誰もが認めるところだが、人類はまさに出版を実現したことで、真にこの力を掌握したのだ。いらい長期にわたり、文明は出版物によってこのうえなく発展し拡大してきた。

また出版物は、それじたいが文明発展の重要なしるしでもある。一五四三年、人類は宇宙と人体の構造についての認識において飛躍的な発展をとげたが、このことはこの年、コペルニクスの『天球の回転について』や、ベサリウスの『人体の構造』が出版されたことに示されている。一八四八

年の『共産党宣言』の出版は、マルクス主義理論の確立と、国際プロレタリア運動が歴史のあらたな段階に進んだことを示している。⁽¹⁾

無数の星が輝きを放つ人類の文明史を仰ぎ見れば、幾多の星座とは、一つひとつの出版物の輝きの集合であることがわかるだろう。文明史上に出版物がなかったならば、なんとも貧しく、なんとも灰色であつたはずである。イギリスの哲学者、ポッパーはかつて、『客観的知識』という書のなかで二つの「思想実験」をおこなったが、これは人の思考回路を広げるものであつた。

第一の実験でポッパーはつぎのような状況を仮定した。ある災害がおこり、人類のあらゆる創造の手段と主観的な知識のすべてが、一朝にして無に帰した、そして図書館と、人類の学習力だけが残されたらどうなるか、と。これについて、かれはこう結論を出した。

——世界はすぐさま廢墟の中から再び新しく立ち上がるであらう。

第二の実験ではポッパーはこう仮定した。人類は壊滅的な災害にあい、図書館も灰燼に帰し、残つたものといえは人の学習力だけだつた、と。これについて、かれはこう結論を出した。

——人類が躓きから立ち上がるのは難しく、復興には長い夜のような時間が必要であらう。⁽²⁾

この二つの「実験」の結論は、ひろく有識者たちの賛成をうけた。じつさい、出版物はすでに現代人が片時も離すことのできない生活必需品となつてゐる。出版物のない世界は、森林のない大砂漠にひとしい。出版物のない社会で人間がどのように生きるのか、想像することは困難だ。ましてそこに発展があるとは、とうてい考えられない。

中国は紙と印刷技術の発祥地であり、世界の出版業の発展に比類なく貢献してきた。また中国は、

出版事業がもつとも早く発展した国のひとつでもある。世界の驚嘆と羨望をあびる中国文化の精髓はほとんどが出版物となっており、そのおかげで今まで保存されたのである。

さきごろ、中国新聞出版代表団の同僚と私は、四大文明の歴史をもつ国のひとつ、エジプトを訪問した。気宇壮大なピラミッド、哲学の光を放つスフィンクス像、そして古代人についての無数の情報を保存するミイラと、ナイル河畔のカルナック神殿。これらは、われわれ一人ひとりの胸に響き、古代エジプト文明を敬慕させた。しかしそれと同時に、古代エジプト文化の書物が出版されず、後世に伝えられなかったことが残念に思われた。そしてまた、中華民族の出版事業に貢献してきた先人たちにたいし、感激をおさえることができなかった。もし蔡倫、畢昇がいなかったら、もし『六経』『二十五史』がなかったなら、『資治通鑑』が、『永樂大典』が、『古今圖書集成』が、そして『四庫全書』がなかったなら、世界文明史において、中国は今日のような独自の地位を占めることができなかったらうか。

中華人民共和国の成立によって、中華民族の出版事業はあらたな発展期を迎えた。四十余年来、とくに「一期三中全会（一九七八年）」以後の十余年のあいだに、社会主義現代化建設という状況のなかで、出版の地位はかつてないほど高まった。図書、定期刊行物、テープ・ビデオの出版、書籍雑誌の印刷、配本。さまざまな新中国の出版事業は、飛躍的に発展した。これは中国共産党と人民政府が出版事業を重視した大きな証である。

古代の中国についてふりかえれば、「乱世には焚書、太平には編書」ということができる。『宋史芸文志』によれば、「歴代の書籍は、秦より大きな災厄はなく、隋唐より繁栄したことはない。隋の

嘉則殿の書物は三七万卷。唐の蔵書は開元年間にもっとも多く、八万卷の奇書があった」という。

現代中国の出版物は、隋や唐など封建社会の最盛期に比べても、量的にはもちろん、質的にも、はるかにひきはなしている。現在では年間九万点あまりの書物が出版されている。これは中国がかつてない太平の世を迎えたことを反映しており、世界でもぬきんでている。国運がさかんになれば、出版もさかんになる。

新中国の出版事業は、社会主義事業の重要な構成要素である。出版事業は社会主義建設の一般的な任務にしたがい、奉仕しなければならない。これもまた、中国の出版業者の歴史的な使命である。この数年来、世界には急激な分裂と再編成を経験した。しかし社会主義中国は基盤からして安定し、「」だけは美しい風景」「毛沢東の詩の一句」という状況である。これにより、一一期三中全会らしい鄧小平同志が尽力し指導してきた、経済建設を中心とし、四つの基本原則（社会主義の道、人民民主独裁、中国共産党の指導、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の四つを守ることを堅持し、改革开放を堅持するという基本路線が正しかったことが証明された。また、中国の特色ある社会主義を建設する基本理論と偉大なる実践が正しかったことも証明された。

中国人民がこれらの基本路線を長期にわたって堅持し、総力をあげて経済建設をすすめてゆくなら、社会主義の優越性はさらにじゅうぶんに顕示されるであろう。そうなれば、一時は社会主義を信頼しなくなった人びとも、ふたたび信頼をとりもどすであろう。歴史は、西側のある種の予言者にたいし破綻を宣告するであろう。社会主義に注目する、あるいは熱愛する、すべての人びともっとも強い励ましをうけるであろう。

今日の世界では、大國間の競争においては軍事力が依然として重要である。しかし核戦争を考慮すると、大國間が戦争によつて各種の問題を解決する可能性は減少したといえよう。ある外國の研究報告によれば、經濟力が軍事力によつて代わり、國際權力のもつとも重要な要因になったという。この説は妥当なものである。

經濟力がなければ國際的關係における發言權はない。どれほどの經濟力をもつか、どれほどの發言權をもつか、ということなのだ。世界の潮流は滔々^{とうとう}と流れ、これに隨^{したが}うものは榮え、これに逆らうものは滅びる。新中国の出版業者たるものは、一人ひとりが刻苦勉勵し、中國的特色をもつ社會主義的現代化強國の建設のために、精神と知識によつて支持したい、良好な世論環境を提供したい、という使命感と緊張感をもたなくてはならない。

出版事業の健全な發展のためには、社會主義の堅持が必要である。まず第一に、マルクス主義の指導的な地位を堅持する。マルクス主義の指導に背くと、出版事業は必ず誤つた道に踏みこむ。これは、すでに数十年の實踐が証明している。改革開放の新しい状況にあつて、出版事業は社會主義の道を堅持する。また第二に、社會的な利益と經濟的な利益の關係もまた、適切に処理する。利潤のみを追求して社會的效果を犠牲にしてはならない。これは中國出版界の基本的な教訓である。

つまり、出版物は精神的な生産物であり、特殊な条件をもつ、ということを正しく認識しなければならぬ。

訳注〔一〕 本文にみられる三冊は、次のとおり。

Nicolaus Copernicus, *De revolutionibus orbium caelestium*, 1543.

Andreas Vesalius, *De corporis humani fabrica libri septem*, 1543.

Karl Marx, Friedrich Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei*, 1848.

(2) Karl Raimund Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, 1972 (ポパー『客観的知識』森博訳、木鐸社、一九七四年)

(3) 六経、易、詩、書、春秋、礼、樂をいう。六芸とも。後代になると易、書、詩、周礼、礼記、春秋をさすこともある。

二十五史——中国歴代の官修の史書（正史）二千五をいう。史記、漢書、後漢書、三國志、晋書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、旧唐書、新唐書、旧五代史、新五代史、宋史、遼史、金史、元史、明史（以上を二十四史という）、新元史。

資治通鑑——宋の司馬光の著。周代から後周まで千三百六十余年にわたる歴史を編年体で記した。二九四卷。

永樂大典——明の永樂帝の命で編纂された。古今の文献を書名ごとに分類し、まとめたもの。もと二万二九三七卷あったが、明末の戦乱で失われ現在はごく一部しかのこっていない。

古今圖書集成——清、康熙年間に編纂され、現在ある類書のなかでは最大のもの。永樂大典の残巻を増補してつくられた。一万巻。

四庫全書——天下の書をあつめて経、史、子、集（四部）に分類した最大の叢書。清、乾隆年間十余年をついやして完成した。内容すべてを筆写したものは七万九千余巻、書名だけを記録し内容はのこさなかったものは九万三千余巻。このそれぞれの概略を説明し、解題したものを四庫全書総目提要」という。

〔4〕 宋史、中華書局本、第一五冊、五〇三二頁にみえる。

出版事業における正常化への歩み

「解題」現在の出版事業の状況は毎年、図書は初版・再版をあわせて一〇万余点、テープ・ビデオ「音像」。録音録画物」類は一万二千点、新聞雑誌は八千余种、全体的な質も向上し、規模、成果ともにみるべきものがある。これらは「文化大革命」の空前の災難をのりこえた正常化の成果であるが、ここまでの歩みは容易ではなかった。とりわけ正常化がはじまった数年間の苦しみは筆舌に尽くしがたく、深く私の脳裏に刻みつけられている。経験した事実をここに記すとともに、この間の出版事業を主宰した先輩出版者にたいする追憶をのべた。

私は一九七二年末、文化部（部は日本の省にあたる）が湖北省咸寧^{かんねい}に設けた「五七幹部学校」（労働による再教育の場所）から国家出版局（当時、國務院出版口と称した）に転出し、出版活動にたずさわる道を歩みはじめた。幹部学校に下放されていた人間がつぎつぎに北京にもどってきたのはこの年のことで、局直属の出版社では業務が再開されたばかりだった。門外漢のやからが国家レベルの出版社を牛耳っていて、経験をつんだ古参の出版者は発言権もなく、事務処理も小心翼翼^{きくようきくよう}、苦勞して

いた。出版される図書は微々たるもので、毛沢東、マルクス・レーニンの著作、それに若干の政治的なパンフレット以外、出版すべきものが出版できなかった。

四人組の「二つの評価」批判から着手

出版界に路線、方針、政策についての根本的な転換があらわれたのは、全国のほかの分野と同じように、一九七八年二月、党の第一期三中全会にはじまる。じつは四人組（毛沢東夫人の江青、王洪文、張春橋、姚文元ら。文革に猛威をふるった）を逮捕したときから、すでにこうした転機はあった。このことは、かれらが出版界に下した「二つの評価」を批判し除去したことにみられる。

「二つの評価」というのは、毛沢東の署名により下達された中国共産党中央の一九七一年四三号文件のなかで提起されたもので、その内容は、「建国以来の出版界は『反革命的な黒い路線の独裁』下にあり、『資本主義の道を歩む一派』に指導権を握られていた。いま、ブルジョア的な知識人が出版界にあつて支配的地位を占めているが、これらの人間をやめさせて、新しく出版事業の隊列をつくらなければならない」というものだった。

これはこんにちからみて、まったくのでたらめだった。

「幹部学校」から現場にもどったとはいえ、第一期三中全会をむかえるまで、われわれにとって大きな圧力となっていたのは「二つのすべて」だった。「二つのすべて」というのは、「すべて毛沢東が下した決定は擁護せよ、すべて毛沢東がだした指示は遵守せよ」という方針（毛の死後、華国鋒が

となえた」で、実務にたずさわる現場の人間がこの庄力をはねかえそうとしても、とうてい不可能だった。

これをやめさせないかぎり、出版界に生氣はもどらない。文革によって封じこまれた建国このかたの圖書をふたたび世にだすことはできない。

保存してある関係資料を調べたところ、「二つの評価」は張春橋、姚文元のふたりが周恩來總理の指示を無視して、四三号文件に書きこんだものと判明した。

国家出版局の王匡局長（のち新華社香港分社社長）は一九七七年十二月にひらかれた、全国出版工作座談会において、四人組の悪事を暴露することからはじめて、「二つの評価」を批判、否定し、つぎのようにのべた。

『二つの評価』は幹部や知識人をなぐりつけた棍棒だったし、孫悟空の頭をしばった金の輪・緊箍呪のように出版者の頭を長期にわたりしばってきた。これはいまだに影響力をもっている。徹底的に批判し、出版活動にたずさわる人間を解放しなければならぬ』

このように王匡がのべると、案の定、「毛沢東を批判することになりはしないか」という反論があった。なかには上申書まで出した人間もいて、中央の文化部門にあつて出版を管轄していた責任者から「どういうことだ」と問い合わせてきた。

王匡から相談をうけた私は、状況を書きましよう、と答え、「出版工作の状況報告」の「増刊号」として、中央の関係者、関係部門に送った。

「会議がはじまったさい、われわれは、はっきりと言明した。——われわれが批判するのは四人組

が文件に書きこんだ『二つの評価』である、と。したがって、この文件全体は否定しておらず、毛沢東主席についても批判してはいない」と。

これで一件落着した。

一九七七年当時はまだ機運が熟さず、毛沢東が「文革」を発動した極左路線に結びつけることはできなかったが、この会議における「二つの評価」にたいする批判は全国的に新しい機運を生じることになった。

出版の正常化をめざす重大な措置

四人組の「二つの評価」をおしたおすこと。出版界におけるかれらの極左的な思潮を批判すること。これは、これまでの束縛をたちきって出版面の生産力を解放し、精神的な栄養を提供し、読む本がないという社会全般にわたる広い不満を解消するのに必要であった。

これについて、王匡がとりしきる国家出版局は重要な決定を下した。それは全国的な規模で出版・印刷の力を動員し、建国いらいすでに出版されたうちの三五点を再版するという決定で、これは出版界を勇気づけたし、知識人のあいだでも高く評価された。

再版された書物はつぎのようである。

- ・郭沫若、茅盾、巴金、曹禺の主な作品や『紅旗譜』『鉄道遊撃隊』など現代文学一〇点。
- ・『唐詩選』『宋詞選』『古文观止』『東周列国志』『儒林外史』『官場現形記』など古典九点。

・チューホフ、モーパッサン、シエークスピア、イブセンの作品、選集、『レ・ミゼラブル』『ゴリオ爺さん』『ウージェニー・グランデ』『アンナ・カレーニナ』『虻』『アラビアンナイト』など外国文学一六点。

これらの出版以前にも『紅岩』『青春の歌』『暴風驟雨』『林海雪原』などが出版されていたが、いずれも中央政治局のなかの出版担当の指導者に申請したことによって例外的に許可されたにすぎない。

文革によって封じこめられた名著が、ふたたび陽の日をみた。これは、文化にたいする独裁と、文化を閉鎖する四人組の政策を否定したことであった。

まず北京、上海、広州の大都市から実施されたが、どこでも新華書店のまえには徹夜の行列ができ、開店すればおしあいへしあいだった。いかに人びとに喜んで迎えられたかがわかる。当時においては、出版の正常化は大胆な措置であった。「二つの評価」が批判されたあとの実践的な突破であり、書物にたいする飢餓状態をかなり解消し読者を満足させたのである。

この間、王匡は『魯迅全集』に新しい注釈をつけて出版する仕事を直接に企画、指導した。

これよりさき一九七五年十一月一日、毛沢東は魯迅の著作に注釈をつけて出版する問題についての周海嬰(魯迅の子)の手紙に指示をあたえた。しかし四人組が干渉し、仕事は順調にすすまなかった。このおくれをとりかえし、編集上の誤った考え方を是正し、毛沢東が生前に指示した出版計画を完成するために、国家出版局は一九七七年九月一日、党中央に「魯迅著作の注釈出版にかんし指示を要請する報告」を上申し、さらに二つの手を打った。

一つは魯迅全集の新版について指導を強化したこと。これは胡喬木こきやうぼくがこれを担当するよう提案し、方針を定めて、注釈のなかの重大問題に指示をあたえ、検討ののち決定する仕事を彼に委ねようとしたものである（注釈のなかの重要な問題については、胡喬木は中央の決定をおおぐ）。加えて、文革中に四人組の迫害をうけ、江西一工場において労働中の林黙涵りんもくかんを北京によびもどして全集編集を主宰させ、さらに馮牧ふうぼく、秦牧しんぼくを転属させて注釈に従事する仲間に加え、郭沫若くもくわく、沈雁冰しんがんひやう、周建人しゅうけんじん、王冶秋わうちゆう、曹靖華そうせいかわ、李何林りかくりん、楊霽雲ようせいうん、周海嬰しゅうかいえいらを注釈についての顧問とすることだった。

もう一つは、全集に収める範囲と注釈の原則を確定すること。すなわち新版全集は一九五八年版の内容にくわえて、書信、日記、筆写した古典籍と訳文の序文、跋文および一九五八年いらい発見された佚文いつぶんの全部を収め、かつ魯迅年譜と注釈索引を最終巻に付すというもので、注釈は一九五八年版を基礎とし、そのうち採用できるものはできるだけ採用し、誤っているものは訂正し、不足のものは補足し、煩瑣なものは圧縮し、文章は統一する。ようするに、的確、簡明、平易でわかりやすくする、というものだった。

人びとは忘れていないと思うが、一九五八年版『魯迅全集』については、四人組は文革中に白を黒といいくるめ、非難をくわえた。とくに、一九三〇年代の二つのスローガンについての論争、これは周揚が提起した「国防文学」と魯迅が提起した「民族革命戦争の大衆文学」とにかんしての論争であったが、これについて周揚、林黙涵にたいし、罪をなすりつけ、鞭でうつようなことをしたのだった。

林黙涵を全集編集の仕事につけること、一九五八年版全集を新版注釈の基礎とすることが、王匡

が主宰する国家出版局によって党中央に申請され承認をうけた。これも正常化をめざす措置の一つであった。

一九八一年に人民文学出版社は『魯迅全集』（全一六巻）の新版を出したが、これは学術、出版界の専門家によるすぐれた成果であつて、王匡はこれの企画と方針決定に重要な役割をはたしたのである。

タブーを突破した児童読み物出版会議

王匡が香港に赴任したあと、国家出版局の仕事は新聞出版畑の陳翰伯ちんかんぱくが主宰し、一九八二年までつづいた。この期間は一二期三中全会が歴史的な大転換をもたらした時期であり、出版事業に大転換があつた。林彪りんひょう（毛沢東に抜擢されたが、暗殺を企て自滅）と四人組反党集団はそれぞれ粉砕されたが、なお極左的な路線がもたらした後遺症は癒されず、同時に、われわれにとってははじめての新しい課題にも直面してゐた。

こうした歴史的な転換にあたつて、陳翰伯の指導は的確、簡明で、「思想を解放して正常化することとはこの二、三年らしい主流であり、これが個別の仕事をつらぬいている」というものであつた。児童読み物のタブーを打破することに、かれはまず力をいれた。中国の未来の主人公が本が読めるようにし、健康に成長させようとながったのである。当時、本はなかつた。とりわけ児童の読み物がなかつた。

一九七八年一〇月、江西省廬山^{ろざん}で少年兒童出版工作座談会がひらかれ、各界の注目をうけ、期待する声も多かった。

宋慶齡^{そうけいれい}女史は全國人民代表大會常務委員會副委員長、中國人民兒童を守る全國委員會主席として、康克清^{こうこくせい}女史は全國婦女連合會主席として會議にたいし祝電をよせた。有名な兒童文學者・葉聖陶^{ようせいとう}、謝冰心^{しゃひやうしん}、張天翼^{ちやうてんえき}、高士其^{こうしき}は病氣のため参加できなかつたが、先輩として書面による發言を求め、會議の成功を祝い、すぐれた兒童読み物を多く出版するよう期待する旨をのべた。會議に参加した全國の各出版社の責任者や兒童文學の作家は、兒童読み物の作者を迫害し、出版を不可能にした四人組の罪惡を批判し、健康で有益な兒童読み物を書く決意を表明した。

陳翰伯^{ちんはんはく}は「思想を解放し、タブーに踏みこみ、兒童読み物の花咲く春を迎えよう」と題する報告をおこない、つぎのようにのべた。

——『鬼を恐れなかつた物語』のなかに、こんな話がある。

ある小さな祠^{ほこら}のまえに小川が流れていた。男がこれを渡ろうとして、祠のなかから閻魔大王^{えんまだいおう}の木像をもちだし橋のかわりにして、足で踏みつけて渡つていった。あとから來たべつの男が、閻魔様を足で踏んでもつたいないと、おそろおそろ、もともどした。夜になり、怒つた地獄の小鬼たちが集まつて相談し、閻魔大王を足で踏んだ男に天罰をあたえよう、ときめた。

ところが、聞いていた閻魔大王は、

「あとからきた男をこつぴどく罰してやれ。さきに渡つていった男は、もともとわしらを信じていないから、罰をあたえたところで、ききめはないぞ」といった。

陳翰伯は結論として、「鬼を恐れるな」とよびかけ、こういった。

「四人組もこんなものだ。信じるなら恐ろしい。信じなければ恐ろしくない」

かれはついで、思想の解放とタブーの打破について思想、理論、歴史の角度からのべたあと、「ヒューマニズム」が大きなタブーになっているのを突破せよ、と強調した。この数年らい、四人組にかきまわされて、「ヒューマニズム」「人道」は消え、逆に「暴力」「武道」が勢いをえ、「人道」と「武道」を対比した、なにかといえ、ナイフをふりまわす。階級による人間の分析が必要だとし、でも、「ヒューマニズム」を抹殺してはならない。

かれはさらに呼びかけた。母性愛、人類愛を重んじよう。伝統的な道徳や児童文学の理論をタブー視することをやめよう。そうすれば、われわれは狭い歩廊はなだちを脱出して広大な平原に出ることができ、少年・児童のためによりよい作品をより多く創作できる。

この会議は一九七九年六月一日の「児童節」「子供の日」までに、単行本一千点を出版し、三年以内にシリーズ二十九種を出版する計画をたてた。

ところが、実施してみると、計画はたちまち突破され、いまだに再版をつづける質の高いロングセラーさえ生まれた。

一九七八年二月二日、国務院は、国家出版局などのこの会議についての報告を承認し、各方面に伝達した。

いま児童の読み物が毎年四千点以上も出版され、豊富多彩、質的にも向上している。これは一九七八年の廬山の会議にはじまるというべきである。しかも、全出版領域にも積極的な影響があった。